

「800字文学館賞」のご縁 (その二)

野瀬 隆平

東日本大震災が起きた年は、特別に大震災をテーマとする文章を募集することとなった。多くの作品が寄せられたが、受賞した中に今でも記憶に残っている作品がある。青森に住む女性Tさんの文章である。

長い間、闘病生活を送っているご主人がいるが、震災の直後は混乱しており、直ぐには病院に駆けつけることが出来ない。やっとのことで、たどり着くことができた。しかし、いつもは四人しかいない病室に、九人もの患者が詰め込まれていた。怪我をした人たちが急きょ運び込まれたためである。

まずは、ご主人の顔を見て一安心したものの、五年もの長い間胃ろうを受けており、働き盛りの人が大勢いる中で、申し訳ない気持ちになる。それを察した看護師さんが、「今まで充分働いてこられた方ですから出来る限り介護させていただきますよ。」と優しい言葉を掛けてくれる。

オムツを取り換えようとして、驚いた。何と青い水玉模様のオムツを付けているではないか。オムツが品不足で幼児用のものが使われていたのだ。

「思わずくすっと笑ったらもやもやが晴れた。そうだ。限りなく、いとおしい命がここにある。」で文章は終わっている。

この作品が掲載されている翌年の『悠遊』をTさんに送ったら、しばらくして礼状が届いた。ご主人は一月に他界したとのこと。さらに文面は続く。

どこかの病院を視察した自民党の幹事長が、胃ろうを受けている患者が何人も並んでいるのを見て、「まるで人間に寄生しているエイリアンが人間を食べているみたいだ」と云ったのが新聞で報道された。それを讀んだTさんは、「何ということでしょう。私の悲しみに火がついてしまいました。」という。

胃ろうを受けていた主人をエイリアン扱いするとは。いたたまれない気になったTさんは、自分の感情をぶつける文章を新聞に投稿、それが掲載された。

このような思いを切々と訴える手紙であったが、最後は企業OBペンクラブの発展を祈っております、で結ばれていた。